古田史学の会・東海　　平成27年

東 海 の 古 代

第173号　2015年01月

会長　：　竹内　強　　副会長・発行　：　林　伸禧
編集　：　石田敬一　　投稿先アドレス：　furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

2015年(平成27年) 年頭にあたって

古田史学の会・東海　　会長　竹内 強

新年明けましておめでとうございます。

2015年がどんな年になるのか、私のような薄学の凡人には予想もつきません。しかし、近年の社会の情勢や経済を眺めれば、年金で細々と暮らしている老人にとっては楽に暮らせる世の中ではないようです。だからといって若い人たちが希望を持てる時代かというとそれもまた厳しい時代のようです。

私たち歴史を学ぶ者にはよくわかりますが、こうした時代には必ず英雄が現れたり、偉大な宗教者が現れるものです。展望をなくした人々に希望を与えてくれる、そうしたことが歴史の中で繰り返されてきたのではないでしょうか。現在の日本社会においても同様のことが繰り返されるのでしょうか。

最近、池内了著の岩波ブックレット『科学のこれまで、科学のこれから』(岩波書店、2014年)を読みました。現代科学の問題点と限界ということが書かれていました。この小冊子では、これまで、「科学の方法として要素還元主義を徹底し、科学はいかなる問題にも答えが出せるとの幻想を人々に抱かせたことがあるだろう。要素還元主義とは、目前にある現象をより根源的な要素（部分）に分けて徹底して調べれば法則や反応性がより鮮明に現れ、部分の和は全体になり、原因と結果は一対一で厳密に結びつけられているという信念に基づいている。この方法はデカルトが唱えた科学の方法で、以来350年以上の間、科学の王道として君臨し、科学の様々な分野で成功してきたことは確かである」とされます。しかし、この科学に対する要素還元主義に起因して近年様々な問題が指摘されています。

その一つは、科学者がごく狭い範囲の専門家になり、全体を俯瞰し総合的に物事を捉えられなくなっているのではではないかということです。ホセ・オルテガ・イ・ガセットが「専門化の野蛮性」(『大衆の反逆』寺田和夫訳、中公クラシックス）と呼び、研究者が自分の専門的な研究以外について知らないことを一つの美点であると主張するほどになっていることを批判するように、科学者は総合的知識にたいする興味を否定するようになりました。オルテガは1930年代という早い時期にこうした科学と科学者たちに警告すべきだと論じ、それから80年以上が過ぎた今研究の世界はどうなっているでしょう。「3・11」を経験した原発の専門家が、福島原発事故に関して何ら反省の意を示さないだけでなく、あたかも何事もなかったかのように原発再稼働を唱え、積極的に原発の海外輸出まで推進している、この状況こそが「専門化の野蛮性」の現れだと思います。

歴史学、特に古代史の分野でもこうした考えが主流になっていると感じているのは私だけでしょうか。大局的な歴史観は、無くてはならないものだと思います。

新年を迎えるにあたり、会員の皆さんとともに、専門分野の狭い概念のみに囚われず広い視野を持って古代史の研究を進めていこうと、気持ちを新たにしています。

神功紀と百済王系譜
ー古代史覚書帳ー

瀬戸市　　林　伸禧

1　はじめに

『日本書紀』神功紀に記述されている百済王系譜には誤りがあると思われるので報告する。

2　『日本書紀』神功紀における百済王系譜

神功紀における百済王系譜の記事は、表「神功紀での百済王系譜記事」のとおりである。

その系譜をあらためて整理すると、次のとおりである。

肖古王→貴須王→枕流王→辰斯王

3　『三国史記』における百済王系譜

『三国史記』*1 における百済王系譜は別紙表１のとおりである。

この表１をもとに、下表「神功紀における百済王系譜」（肖古王～辰斯王）を重ね合わせると、次のとおりである。

肖古王→仇首王（貴須王）→古尓王
……
→契王→近肖古王→近仇首王（須王）
→枕流王→辰斯王

4　神功紀での百済王系譜と年代

(1) 神功紀での百済王系譜

神功紀は、次の２つのうちのいずれかにより記述していると考えられる。

①貴須王（仇首王）の次の「古尓王～近仇首王（須王）」を削除して記述している。

②「肖古王･仇首王（貴須王）」を「近肖古王･近仇首王（須王）」とみなして記述している。

(2) 『三国史記』の年代

『三国史記』における薨及び即位は、次のとおりである。

①肖古王の薨及び仇首王の即位は２１４年（神功５６年）である。

②近肖古王の薨及び近仇首王の即位は３７５年（仁徳６３年）である。

③近仇首王の薨及び枕流王の即位は３８４年（仁徳７２年）である。

④枕流王の薨及び辰斯王の即位は３８５年（仁徳７３年）である。

(3) 考察

神功紀での百済王即位年を検討すると、枕流王の即位３８４年は、書紀紀年では２６４年であるから、③の枕流王の即位時期を「１２０年（６０干支２巡）」遡らせており、また辰斯王の即位３８５年は、書紀紀年では２６５年であるから、やはり④の辰斯王の即位時期を１２０年遡らせている。

表　　神功紀における百済王系譜記事

※　岩：日本古典文学大系『日本書紀』上の略号
　　小：日本古典文学全集『日本書紀』①の略号

西暦	干支	和暦		神功紀記事	岩	小
255	乙亥	神功	55	五十五年　百濟肖古王薨	359頁	462頁
256	丙子		56	五十六年　百濟王子貴須立為王		
264	甲申		64	六十四年　百濟國貴須王薨　王子枕流王立爲王	361頁	464頁
265	乙酉		65	六十五年　百濟枕流王薨　王子阿花年少　叔父　辰斯奪立爲王		

※下線は筆者

*1　『三国史記』:『完訳　三国史記』上・下（金　富軾著、金思燁訳、六興出版、上：昭和55年12月、下：昭和56年2月）による。

さらに②の近仇首王の即位を神功紀の貴須王（仇首王）とみなすと１２０年遡ることとなる。

以上から、神功紀では、「(1)神功紀での百済王系譜」の②を採用し、「肖古王・仇首王（貴須王)」を「近肖古王・近仇首王（須王)」とみなして記述したと思われる。ただし、何故このように１２０年遡らせたのかは不明である。

５　『日本書紀』校注書

日本古典文学大系『日本書紀』上[*1]（以下「岩波本」という。）及び日本古典文学全集『日本書紀』[*2]（以下「小学館本」という。）では、頭注で、別紙表２のとおり述べている。その概要は次のとおりである。

①岩波本・小学館本とも、「肖古王」を「近肖古王」のこととしている。

②岩波本・小学館本とも、「王子貴須」を「近仇首王（諱は須という。）のこととしている。

③岩波本では『梁書』百済伝に記述されている「王須」を、「王子貴須」の「須」としている。

④小学館本では、神功紀と『三国史記』での近仇首王の即位年の違いについて、記述方法(注)（越年祥元法、当年祥元法）によるものとしている。

⑤岩波本・小学館本とも、神功紀の年代を１２０年（干支二運）下げると『三国史記』と一致するとしている。

⑥岩波本・小学館本ともに、第１３代を肖古王（近肖古王)、第１４代を王子貴須（近仇首王）としている。

６　『日本書紀』校注書に対する論評

(1) 岩波本・小学館本の解説について

『三国史記』では、「５代肖古王、６代仇首王」と「１２代近肖古王、１３代近仇首王」に、よく似た百済王名が存在する。特に、「仇首王」は「或云貴須」と記述されており、仇首王は別名「貴須王」と呼ばれていたと思われる。それ故に、「５代肖古王、６代貴須王（仇首王)」の即位記事は、神功五十五年、五十六年の記事と一致する。ただし、『三国史記』では、神功五十五年（２５５年）の翌年で即位したとは記述されていない。また、「王子貴須」の頭注では、『梁書』百済伝の次の記事

晋太元[*3] 中　王須　義熙中　王餘映　宋元嘉中　王余毗　並遣献生口　（中華書局版『晋書』804頁）

から「王子貴須」は「須」にあたるとしているが、王は「須王」であって「貴須王」ではない。

以上から、神功紀では、『三国史記』の「５代肖古王、６代仇首王」と「１２代近肖古王、１３代近仇首王」を合体していると思われ、岩波本・小学館本とも、神功紀の記述に整合性をとるように解説していると考えられる。

(2) 「近肖古王、近仇首王」の代位

「近肖古王、近仇首王」の代位を岩波本・小学館本では１３代、１４代とするが、『三国史記』では１２代、１３代としており１代異なる。

「古尔王」の即位前紀に、

仇首王在位二十一年薨　長子沙伴嗣位　而幼少不能爲政　肖古王母弟古尒　即位

との記事があることから、「仇首王の長子沙伴」を百済王として一代にカウントしている。

しかし、『三国史記』では王としての年代記が記述されていないので、岩波本・小学館本が一代と見なすのに疑問がある。代位は『三国史記』に合わせるべきものと考える。

（注）　即位年の記述方法

君主の元年について、即位の年か、即位の翌年か、そのいずれを記述するかによって、「当年祥元法」「越(踰)年祥元法」と称されている。

これについて、平勢隆郎は『「史記」二二〇〇年の虚実』（講談社、2000年）の１１・１２頁で次のとおり述べている。

中国歴代の王朝では、皇帝が死去しても、すぐに元年にならなかった。太子はすぐに即位するのだが、年号の方は翌年になった時点で元年となる。「年を踰(越)」して改元することから「踰年改元」と呼ばれてきた。　－中略－

ことの起こりは、戦国時代にさかのぼる。当時はまだ年号がなかったから、問題になるのは君主在位の年代である。改元という言葉が年号と密接に関わって論じられてきているので、研究者の間では、「改元」を避けて「祥元」という言葉を用いる。「元年を称する」という意味である。

---

*1　日本古典文学大系『日本書紀』上：坂本太郎始め４名校注、小学館、昭和42（1977）年3月
*2　日本古典文学全集『日本書紀』①：小島憲之始め５名校注・訳者、岩波書店、1994（平成6年）年4月
*3　太元：376～396年。近仇首王（一云諱須）：375～384年

難波の宮の真実(その２)

一宮市　　竹嶌正雄

Ⅰ．はじめに

東海の古代・第172号(12月号)で「難波の宮の真実(その１)」として、崇神天皇の桑間宮、応神天皇の大隅宮、仁徳天皇の高津宮について考察し報告した。今回は、その後の天皇の難波の宮について考察する。参考資料は前回と同じ小学館の新編日本文学全集2『日本書紀』①、同3『同』②、同4『同』③（以下「新編『書紀』①・②・③」という。）を用いた。

Ⅱ．難波の地にあった宮と館および津(港)・その２

１．允恭天皇の難波津

（允恭）四十二年春正月乙亥朔の戊子(14日)に、天皇崩ります。時に年若干(そこばく)なり。是に新羅王、天皇既に崩りましぬと聞き、･･･(略)･･･。是対馬に泊りて、大きに哭る。筑紫に到りて、亦大きに哭る。難波津に泊りて、･･･(略)･･･。難波より京に至るまでに、･･･(略)･･･、遂に殯宮に参会へり。

冬十月庚午朔の己卯(10日)に、天皇を河内の長野原陵に葬りまつる。

冬十一月に、新羅弔使等、喪礼既に闋りて還る。爰に新羅人、恒に京城の傍の耳成山・畝傍山を愛づ。　　（新編『書紀』②、127・128頁）

新羅王の使者は、対馬に泊り、筑紫に到り、難波津に泊ったとある。普通このような行程文には日時を冠するのであるが、それがないので難波津が時間差のない筑紫にあるようにも受け止められる。

しかし、11月の項に、「新羅人、恒に京城の傍の耳成山・畝傍山を愛でていた。」とある。この京城は允恭7年12月の条に、「新室に宴したまう。」とあり、その新室について新編『書紀』②の113頁の頭注で「遠飛鳥宮」としている。つまり、大和の飛鳥邑にあったと考えてよいと思う。

すると、「難波より京に至るまでに、」の難波も近畿の難波と考えられる。

よって、この「難波津」は仁徳62年遠江国司が献上した官船が着いた「桑津邑の大津」である。

２．雄略天皇の住江津

（雄略）十四年春正月丙寅朔の戊寅(13日)に、身狭村主青等、呉国使と共に、呉の献れる手末(たなすゑ)の才伎(てひと)、漢職・呉職と衣縫の兄媛・弟媛等を将て、住吉津に泊つ。

是の月に、呉客の道を為りて、磯歯津路に通して呉坂と名く。　　（新編『書紀』②、197頁）

雄略天皇の寵愛を受けていた身狭村主青は、雄略8年2月に檜隈民使博徳と共に呉国に派遣され、同10年9月4日に筑紫に帰ってきた。そして、同12年4月4日に再度呉国に派遣され、同14年1月13日に帰国した。この時、呉国の使者と共に「住吉津」に停泊した記事である。この「住吉津」であるが、10年の項にわざわざ「筑紫に到る。」としているので、14年に帰国して着いた「住吉津」も福岡市の住吉神社近くの港であると考えられるが、この項の直後の記事より、この「住吉津」は難波の住吉津であると考える。即ち、応神22年4月に兄媛が吉備に向って出港した大津と同じである。

直後の記事とは、「呉国の使者のために磯歯津路を通した。」というものである。この磯歯津路は住吉神社の南から東の八尾市に真直ぐ向かう現在の国道479号に重なる道である。つまり、磯歯津路は、新編『書紀』②の196頁の頭注にあるように、この国道の東端あたりで大和川本流または分流の平野川に接続していた。呉国の使者は3月まで住江津の館に逗留した後、磯歯津路を通り、大和川を通って大和の地に到ったのである。

ここで一つの推測であるが、なぜ磯歯津路を通す必要があったかを考えて見たい。今まで大和への交通は河内湾にある桑津邑の大津から平野川から大和川本流に入り、遡って行ったのである。しかし、雄略天皇代には河内湾が淀川の河口の堆積により河内湖になり、桑津の大津が機能しなくなっていたのではないかと思われる。この為に大阪湾から大和川に一番近い陸路

となる住吉津からの磯歯津路が必要になったと考える。つまり、難波津と言わずに住吉津と言ったのは此の為と考える。

３．継体天皇の難波館

（継体）五年冬十月に、都を山背の筒城に遷したまふ。

（継体）六年夏四月辛酉朔の丙寅（6日）に、穂積臣押山を遣して、百済に使せしむ。仍りて筑紫国の馬四十匹を賜ふ。

冬十二月に、百済、使を遣して貢調る。別に表して、任那国の上哆唎（おこしたり）・下哆唎（あるしたり）・娑陀・牟婁、四県を請ふ。･･･（略）･･･。廼ち物部大連麁鹿火を以ちて、宣勅使に宛つ。物部大連、方に難波に向かひ発（た）ちて、勅を百済客に宣らむと欲ふ。

（新編『書紀』②、297～299頁）

武烈天皇の後任に、大伴金村大連らの近畿政権会議により仲哀天皇の五世孫の倭彦王を迎えようとしたが、倭彦王は迎えの軍兵に恐れをなして遁走して行方知れずになった。

代わって応神天皇の五世孫の継体天皇を迎えることになった。継体天皇は、一度は躊躇したが近畿政権に参加することにした。近畿政権に参加することになった継体天皇は元年正月24日樟葉宮に到着し、2月4日に大伴金村大連が天子の鏡・剣の璽符を奉って再拝した。しかし、継体天皇はリーダーになることを再度辞退した。是に対して、大伴大連は頑なに要請した。そして、次の文章がある。

男大迹天皇、西に向ひて譲りたまふこと三（みたび）、南に向ひて譲りたまふことしたまふ。

（新編『書紀』②、290・291頁）

この文章の意味するところを推測してみる。西に向って三度辞譲したとは、政治同盟の西国のメンバーである九州・出雲・吉備の三国に向っての態度であり、南に向って再び辞譲したとは、樟葉宮の南にある難波にいる九州代表に対しての態度であると考える。西と南に辞譲の態度を示したが、東の美濃・尾張にしなかったのは、妻の出身地から分かるように東海の代表でもあったからである。

こうした態度の後、近畿政権のリーダーになったが、まだ政治同盟本部のある奈良盆地には入ることが出来ず、5年10月に都を山城の筒城に遷した。翌6年12月に百済の使者を「難波館」に迎えた。

この「難波館」が何処にあったかを考察してみる。前項の雄略天皇の住吉津で述べたように、河内湾は河内湖になっており、上町台地の東側の港は機能しなくなっていたと考えられる。残るは上町台地の西側の港、または淀川河口の北側の港である。これらの内、大和に一番近いのが住吉津である。したがって、この難波館は住吉津にあったと考える。

４．欽明天皇の難波祝津宮、難波の大郡と難波津

（欽明元年）秋七月丙子朔の己丑（14日）に、都を倭国の磯城郡の磯城島に遷す。仍りて号けて磯城島金刺宮とす。

八月に、高麗・百済・新羅・任那、並て使を遣（まだ）して献（ものたてまつ）り、並に貢職（みつき）を脩（たてまつ）る。･･･（略）･･･。

九月乙亥朔に己卯（5日）に、難波祝津（はふりつ）宮に幸（いでま）す。大伴大連金村・許勢臣稲持・物部大連尾輿等、従へり。天皇、諸臣に問ひて曰（のたま）はく、「幾許の軍卒（いくさ）もちてか、新羅を伐つことを得む」とのたまふ。

（新編『書紀』②、361・362頁）

欽明天皇は宣化4年12月5日に即位し、翌年の欽明元年７月１４日に磯城島金刺宮に都を遷した。都を遷し、新しい宮を造ったばかりなのに、その新宮ではなく、翌々月の9月5日に新羅征伐の軍義を行った「難波祝津宮」とは如何なる宮なのかを考えてみる。

「祝津宮」とは文字通りの祝いを行う宮殿であったと考えられる。つまり、即位の祝いや年賀の挨拶などを行う「ハレの宮殿」であったと考える。それは、継体天皇が樟葉宮で「南に向って再び辞譲した」態度を示した対象の宮殿でもある。従って、この宮殿は近畿政権を監督する九州政権の出先機関であったと思われる。そして、それは仁徳天皇の高津宮跡にあったと推測する。

欽明天皇は、その宮殿に即位の挨拶に行幸したのである。

（欽明）二十二年に、新羅、久礼叱及伐干を遣

して、調賦を貢る。司賓、饗遇の礼数、常より減る。及伐干、忿り恨みて罷る。

是の歳に、復奴氐大舎を遣して、前の調賦を献る。難波の大郡に、諸蕃を次序つるときに、掌客額田部連・葛城直等、百済の下に列ねしめて引導く。大舎怒りて還る。館舎に入らずして、船に乗りて穴門に帰り至る。

（新編『書紀』②、443頁）

欽明22年に、新羅の使者・久礼叱及伐干が新羅の産物を持ってやって来たが、外交担当官の饗応の回数が通例より少ないことに腹を立て帰ってしまった。

慌てた新羅はその年の内に再度、使者・奴氐大舎を遣わし、久礼叱が納める筈であった貢物を献じた。

しかし、「難波の大郡」庁舎で、朝貢してきている各国の使者の順位を決めた時、接待役の額田部連・葛城直等が百済の下に連ねて案内したので、大舎も怒って帰ってしまった。そして、宿泊の館舎にも入らず、船に乗って穴門の施設まで帰るに到った。この時の「難波の大郡」を考察してみる。

「難波の大郡」の大郡は、新編『書紀』②の443頁の頭注にあるように行政区画ではなく、外交施設の庁舎と考えられる。もともと、大郡・小郡は孝徳天皇の改新の詔により制定された行政区画である。その内容は、『五十戸で「里」とし、郡は四十里を以って「大郡」とし、三十里以下四里以上を「中郡」とし、三里を「小郡」とする』ものであった。

おそらく、この時に上町台地の東側の難波の地と河内平野の一部とが四十里を持った「大郡」となったと考えられる。この「大郡」の中心は桑津邑であったと思う。

また、上町台地の西側は大阪湾側の浜辺への堆積地の為、土地面積はそれほど広くなく、三里がやっとの「小郡」であったと考えられる。この「小郡」の中心は定かではないが、住江津か、現四天王寺の付近のどちらかであったと思う。そして、郡役所の庁舎も「大郡」「小郡」と呼ばれた。その呼名が、遡って欽明紀の条文の中で採用されたと考える。つまり、「難波の大郡」は外交施設の名であり、桑津邑にあったと考える。

（欽明三十一年）秋七月壬子朔に、高麗使、近江に到る。

是の月に、許勢臣猿と吉士赤鳩とを遣して、難波津より発ちて、船を狭狭波山に控引して、飾船に装ひて、乃ち往きて近江の北の山に迎へしむ。遂に山背の槻に引入れしめ、･･･（略）･･･。更、高麗使者を相楽館に饗へたまふ。

（新編『書紀』②、459頁）

欽明31年4月に、高麗使者が暴風に会い、日本海を漂流し越国に漂着した報告があった。天皇は山城国に相楽館を建て、慰労するよう命じた。そして、7月に、近江の北に着いた高麗使者を「難波津」を出発し、飾船で迎えに行き、山城の高槻館に向い入れた。さらに、相楽館で饗応した。

この時、迎えの使者の許勢臣猿らが出発した「難波津」を考察してみる。

この時代には、すでに河内湖となっており、桑津の港は機能しなくなっていた。したがって、河内湖側にある港は上町台地の北の岬周辺にあったはずである。すると、迎えの使者たちは河内湖から淀川に入り、宇治川、瀬田川を通って琵琶湖へ出たのである。つまり、迎えの使者たちは、港から見える真近な淀川河口へ行き、淀川を遡って行くのであるから表現としては神武紀のように「難波津より川を遡り･･･」となったであろう。ところが、「難波津を出発し･･･」としているので、第一目標である淀川河口は遠くにあるので、気構えて出発したのであろう。したがって、この「難波津」は前述の住吉津と考える。

５．敏達天皇の難波館、小郡と難波の堀江

（敏達十二年）是の歳に、復、吉備海部直羽島を遣して、日羅を百済に召す。･･･（略）･･･。是に･･･（略）･･･。日羅等、吉備児島屯倉に行き到る。朝廷、大伴糠手子連を遣して、慰労はしむ。復、大夫等を難波館に遣して、日羅を訪はしむ。（新編『書紀』②、481・482頁）

敏達12年7月朔に、詔して「欽明天皇の御世に、新羅が内官家の国を滅ぼした。欽明天皇は

任那の復興を計られたが、果たさずに崩御された。その計画を引き継いで、任那を復興したい。今、百済にいる日羅とともに計画したい」と仰せられた。そして、使者を遣わして、百済の日羅を召喚した。

吉備の児島屯倉に着いた日羅等を、朝廷は使者をだして慰労した。その後加えて、「難波館」へ大夫等を遣わして、日羅を訪問させた。

この「難波館」も継体天皇の難波館と同じく住江津にあったと考える。

（敏達十二年是歳）是に日羅、桑市村より難波館に遷る。徳爾等、昼夜相計りて殺さむとす。･･･（略）･･･。遂に、十二月の晦に、光を失ふを候（うかか）ひて殺しつ。･･･（略）･･･。天皇、贄子大連・糠手子連に詔して、小郡の西畔の丘の前（さき）に葬（はぶ）らしむ。

（新編『書紀』②、485・486頁）

百済の策謀を奏上した日羅を、百済の恩率・参官が国に帰る時、徳爾等に日羅の殺害を指示した。難波館に移った日羅は、12月の晦に殺された。天皇は日羅の亡骸を「小郡」の西のほとりの丘の先に埋葬させた。

この条文から難波館と小郡とが近い所にあることが分かる。つまり、欽明天皇の項で、「小郡」の所在場所が定かでないとしたが、ここで住江津の近くにあることが分かった。

（敏達十四年三月丁巳朔の）丙戌（30日）に、物部弓削守屋大連、自ら寺に詣りて、胡床に踞坐（あぐみゐ）て、其の塔を斫り倒して火をけて燔（や）き、并せて仏像と仏殿とを焼く。既にして焼ける余の仏像を取りて、難波の堀江に棄てしむ。

（新編『書紀』②、491・492頁）

蘇我馬子の建てた仏殿、塔および仏像を、物部守屋が破壊した有名な条である。この時、焼け残った仏像を捨てた「難波の堀江」を考察する。

この堀江は、仁徳天皇11年10月に掘られた堀江と同じであろう。淀川、大和川等が運ぶ堆積物で河内湖は、更に狭くなり、平野川沿いにあった桑津の大津は、既に機能を奪われていた。また、洪水も起き易くなっていた為に、掘削が行われ大きなものになっていたと思われる。そして、良好な入江となった河内湖の辺に港が造られ、以後、住江津に代わり「難波津」になったと考える。

６．まとめ

今回考察した、允恭、雄略、継体、欽明、敏達の各天皇、及びこの間の天皇は難波に宮を造ることがなかった。関係したのは「難波館」「難波津」「住吉津」等の外交施設が主なものであった。

しかし、この時代の外交は『日本書紀』と『宋書倭国伝』『三国史記』などとの比較で明らかにされるように近畿政権が行ったものではない。そうしてみると、これらの外交施設とは、あったか、なかったかを含め、大いに疑念が持たれるので再考の必要がある。

済州島古代文化の謎

安城市　　山田　裕

１　はじめに

古代の済州島は、『三国史記－百済本紀』【１】『同－新羅本紀』【２】に、耽羅国と記され、わずかな外交記事のみがある。また、『日本書紀』【３】は、「白村江の戦い」以後に、同国との密接な外交史が記述されている。

同国の建国神話としては、『高麗史－地理誌』【４】や、李氏朝鮮時代に編纂された『耽羅志』【５】に詳述され、建国時に日本国との深い関わりが記述されている。

表題の『済州島古代文化の謎』（成甲書房、1984年）において、著者の宋錫範は建国神話を中心に考古学的知見、風俗・文化などから済州島の古代文化の解明に迫るが、いずれも現時点では謎そのものである。そのため、今後の学術的調査や科学的な究明を期待して結びとしている。本稿では、著者が指摘する諸項目のうちから興味深い項目を紹介する。

以下は、それぞれの項目の要約である。

２　済州島の先住民（ｐ20～25）

先史時代における済州島の先住民の性格を形作ったとみられる諸要因中、特に地理的条件・

気象的条件・人種的条件について記述している。

(1) 地理的条件

東経126度30分、北緯33度30分上に位置し、韓半島の西南部木浦から南方に88海里離れている絶海の孤島である。日本との距離が韓半島よりも近距離にある。

韓拏(はんな)山を中心にして、北方的な様相と南方的な様相が見られるが、これは古代からの交通手段で、北方的（大陸的）な様相の文化は韓国の南半部を経由して済州島に流入したものと考えられ、南方的（海洋的）な様相は東シナ海をわたって済州島に流入したと考えられる。

このように考えると、日本との距離が韓半島よりも近距離であることから、日本で発達した文化が済州島に渡ってきたという可能性も考えられ、済州島と北九州地方との交流関係を明らかにすることにより、新たな展開が見られるのではないかと思うのである。

(2) 気象的条件

気候は韓拏山を中心にして南と北に若干の差異があるが、ほぼ温和的な気候で温帯圏に属し、近海には暖流とモンスーンの影響から、海洋性気候である。周囲の海には多くの魚介類が獲れ、山野に自生する植物は食料に適したものが多かったと思われる。

(3) 人種的条件

済州島の先史時代人は、決して単一の人種ではなく、少なくとも大きくみて2か所以上の方面から流入したものと考えられる。それは北方系列の大陸的要素を持つ人種と南方系列の海洋島嶼的要素を持つ人種の二つだと思われる。

では、どの地方から流入かというと断定はできないが、韓半島の南半部を経由して流入した北方的種族と済州島の南西部へ渡ってきた南方的種族がいたのではないかと推定される。

また、日本の五島列島方面からの流入も全くなかったとは断定できず、興味ある問題点だといえよう。

済州島の建国神話である三姓神話は、その一つの集団が海を背景にして流入した海上勢力であり、この海上勢力が日本から流入した種族ではないかと思うからである。

３　先住民の血統（ｐ25～35）

『三国志・後漢書・通典』等【６】の中国古典にみられる州胡人とは、馬韓の西海上にある大島に居住し、船を持って韓国の本土と通商のため往来したと云う。州胡人とは三韓時代にすでに済州島に居住していた人々ではないだろうか。

もし、そうだとすれば、この州胡人とは如何なる民族であろうか。以上の古典によると、州胡人とは体躯が短小で頭髪は短く、身に着けた衣服は獣皮だが、有上無下の有様だから下衣がなく、およそ裸体だったと考えられる。言語は三韓のどの地方の言葉とも同じではない。【６】

馬韓・弁韓・辰韓の三韓人は、体躯が壮大で頭髪は長く美しく、養蚕を行い絹地の衣服を身に着け、履物を履いていたことから、州胡人と韓人を比較してみれば、人種的な差異があるばかりではなく、習俗上からも大きな差異があるので到底同じ人種であるとは考えられない。

州胡人の習俗から、生活手段として漁労を便宜上成り立つ風俗だともいえるので、州胡人は島嶼地域を流転した島嶼民族であったと推考できる。しかし、問題点として馬韓の西海上にある大島が済州島だと断定できるかである。

(1) アイヌ人説

崔南善氏の説で、今の済州島人にも体貌・あごひげ・ほおひげ・性格等がアイヌ族とよく似ている人々が見られ、また済州島内の地名の中にはアイヌ語源の地名があるので、韓国本土の韓人と違う州胡人は、日本の石器時代人だと思われるアイヌ族の一族ではなかったという説である。

(2) コロポックル人説

金泰能氏の説で、学会において最も新しい説であり、氏は済州島の歴史研究に生涯を捧げた人である。氏の主張点は体躯が短小であることや、アイヌ語が済州島の地名に遺存していることなどを挙げ、日本の九州地方、特に五島列島と至近距離にあり、海路をたやすく渡ること可能であったと考えられる。

(3) アイヌ人説・コロポックル人説に対する著

者の見解

金泰能氏のコロポックル人説は、たいへん興味ある問題であるが、最近の日本の人類学、考古学の飛躍的な発展の成果を全く無視したもので、明治・大正・昭和初期の成果をもとにし、言語学的には牽強付会な説が多く、アイヌ語そのものも全く理解せずに説いていることは遺憾である。（中略）日本の九州地方を根拠地としたコロポックル人が済州島に流入し、定着した人種だという説は全く荒唐無稽な説だといえよう。

そして済州島に所在する多くの支石墓群を見ると、済州島の古代住民の主流は韓国本土から流入した韓民族ではなかったかとの見解も強い。

(4) 岩本善文氏の海神族説

神族は南方から流入した一部で、済州島を経由して弁韓に入り、またその一部は北九州に入り、対馬を経由して弁韓に入った。海神族は済州島・五島・北九州・対馬・弁韓に分布しているとの説である。

(5) 大原利武氏の韓民族説

韓民族は北方から、すなわち中国東部および蒙古方面から満州を経由して韓半島に移住した民族と、南方から、すなわち福建・広東・安南・比島・南洋諸島あるいは暹羅・馬来半島から暖流により北上して琉球を経由し、済州島・全羅南道の海岸・慶尚北道の海岸等に漂着したとする説である。

(6) 李昌煥氏の耽羅族説

太古時代の桓族が居住する地方によって五族に分派し、そのうちの一族が韓族であり、漢族からの馬韓族と韓族から由来した弁漢族が合して一つになり、それがまた三分派し、その一分派が耽羅族とする説である。

(7) 著者の見解

一般的には、韓半島から流入したというのが定説であるが、島と云う特性のため色々な経路が考えられる。

4　済州島の建国神話（ｐ72～82）

「本来、海上の流寓民から成る耽羅国が済州島における初めての国家である。毛興穴（もふんひよる）で良乙那（やんうるな）・高乙那（こうるな）・夫乙那（ぶうるな）の三神が鳥獣等を捕らえて食べ、その毛皮を着て生活を営んでいた。ある日、三神が東海辺で拾った木箱を開けてみたら、一人の男が青衣の三処女と仔馬と五穀の種子等を出しながら言うには、私は碧浪国の使臣であり、国王の命で三王女を連れてきた西海の中岳に三神が降りて建国をしようとしたが、その配匹がいないため建国できない。そこで三王女を配匹にして大業を成し遂げれば願った通りになるであろう。それで、三神は各々三王女を娶り、暮しながら五穀の種子を播き、仔馬を育て開拓したという。」

以上が、耽羅国建国神話の概略である。耽羅国とは、済州島の古代に存在した国名とされている。

同建国神話について、著者は李朝時代、李元鎮牧使によって著述された『耽羅志』を中心に日本とのかかわりを記述している。

(1) 三王女とは

使臣女について、『高麗史巻57地理誌2耽羅縣』並びに『耽羅志』は明白に日本国の使者としている。処女三人は日本国の王女で、国王の命で三王女と三神人と婚姻するために連れてきたとしている。日本国の三王女が持参したという数匹の仔馬と仔牛と五穀の種子等は、済州島の先住民の生活状態が原始的な狩猟生活から農業経済生活の定着生活に移っていくことを意味するし、その意味は済州島においての農業と牧畜業が日本国に由来するということで、この点においても済州島の建国神話は実に興味ある神話だと云える。

勿論、古代国家としての耽羅の実録がないため、耽羅の建国神話をどの程度まで信じ得るかの問題点はあるが、古代から文献によって、碧浪国は大体日本国だと解釈するのが定説である。

(2) 三神人の実体

済州島の建国神話を三姓始祖説または三姓開祖説とも云うが、このような建国神話は古代南方社会に共通する三神信仰の代表的な例だと云えよう。主に農牧生活をしていた韓族に自然崇拝の宗教心から三神崇拝思想が生じたことはも

はや知られたとおりである。

古代南方社会に共通する三神信仰とは、天神・地神・祖上神の三神、または天神・地神・海神の三神に帰するという。

このように考えると、三神人の実体は、良・高・夫の三姓の良乙那、高乙那夫、乙那仰の三神人ではなく、天神・地神・祖上神の三神、または天神・地神・海神の三神ということになる。

新羅の建国神話には朴・昔・金の三姓が登場し、面白いことに、新羅の建国神話において、東海のどこからか流入したと思われる海上勢力である昔氏が、神話の中での話であるが日本の方から来たとのことで、済州島の建国神話と同様に、海上勢力は同じく日本だと云えよう。

三神人に共通する名「乙那」について、アイヌ語で尊称する言葉を加伊奈、酋長を乙名という。“奈”と“名”はみな日本語で“ナ”と発音する。三姓始祖の乙那は氏族長の意味だが、同じ語源だと思われる。

5　済州島の風俗（ｐ115～121）

俗に済州島は「三多・三無・三麗」の島だと云われている。

(1) 三多

三多とは石多・風多・女多を指す。

(2) 三無

三無とは済州島民の正直・純朴・検素を指し、その三無とは乞食がなく盗人が無く門が無いとのことである。残念なことに今日の済州島は韓国内で最も犯罪の多い町とされている。

(3) 三麗

三麗とは美しい人情、美しい自然、美しい果実を指す。

済州島は古来から柑橘の産地で、王室などに進上は勿論、日本国の王室まで珍品として求めて持って帰った昔話が残っており、小学校では音楽の時間に次の歌がある。

“香りも高き橘を　積んだ御船が　今帰る”

日本の垂仁天皇が病中で、其の時の忠臣が常夏国の橘を済州島で求めて帰ったが、生憎と天皇は崩御した後なので、止む無く忠臣は帝陵に橘を献上して自害したという話がある。

6　日本と済州島が関連する風俗（ｐ152～156）

済州島と日本との関連性があることは確実だと云えよう。風俗面での日本との共通点は次のとおりである。

○　女子の裁縫運針法
○　女子が幼児を背負う時の方法
○　女子が荷物を頭上に載せないこと
○　女子が勤勉であること
○　女子は男女間の礼儀上、普通対面を避けるが、そうしないこと
○　炊事場に釜を設けるが、オンドルにつけず、石で別に作ること
○　唐辛子を愛用しないし、冷や飯もよく食べること
○　口笛を吹く習慣があること
○　女子の顔が韓半島の女子より凸凹がもう少し甚だしくて、日本の女子に近いこと
○　若干の言語の共通点などを挙げることが出来ると思うが、多く見られる事ではない。

7　終わりに

以上が『済州島古代文化の謎』の興味深い項目の要約である。

発刊後、30年を経過しているが、カジノリゾート開発が優先し、済州島の学術調査は遅々として進んでいない。この事実は著者が指摘した数々の謎も解明されないままである。

ことに、建国神話の成立時期も明らかになっていない。また、神話か実話かも不分明の状況である。

済州島は200万年前の海底火山が噴火してできた島で、その後は中央にそびえたつ漢拏山が何度となく噴火活動を続け、最終噴火は11世紀初頭と記録され、現在も活火山として知られている。

この地理的事実と『耽羅志』が記す建国神話を重ね合わせると、建国神話が実話であった可能性も指摘できる。

建国神話の成立年代について、『三国史記－新羅本紀』が記す「瓠公（紀元前20年頃？）」や「脱解尼師今（在位57～80年？）」説話との類似性などから紀元前後の実話の可能性も指摘できる。

しかし、漢拏山の噴火履歴が不分明である現時点では、これらの指摘は保留せざるを得ない。

【参考文献】

【１】『三国史記　26百済本紀4』

・文周王2年4月条（476年）

耽羅國獻方物、王喜拜使者爲恩率。

・東城王20年8月条（489年）

王以**耽羅**不修貢賦親征至武珍州。耽羅聞之遣使乞罪乃止、**耽羅即耽牟羅**。

【２】『三国史記　6新羅本紀』

・文武王2年2月条（662年）

耽羅國主佐平冬音律【一作津】來降、耽羅自武徳以來臣属百済、故佐平爲奈官號。至是降爲属國。

【３】『日本書紀』

・継体天皇2年12月条（508年）

南海中**耽羅**人、初通二百濟國一

・斉明天皇7年5月条（661年）

耽羅始遣二王子阿波伎等一貢獻。

・天智天皇4年8月条（665年）

耽羅遣レ使來朝。

・天智天皇5年正月条（666年）

耽羅遣二王子姑如等一貢獻。

・天智天皇6年7月条（667年）

耽羅遣二佐平椽磨等一貢獻。

・天智天皇8年3月条（669年）

己卯朔己丑、耽羅遣二王子久麻伎等一貢獻。

丙申、賜二**耽羅王**五穀種一。是日、王子久麻伎等罷歸。

・天武天皇2年6月条（673年）

壬辰、**耽羅**遣二王子久麻藝・都羅・宇麻等一朝貢。（中略）因命大宰一、詔二耽羅使人一日、天皇新平二天下一、初之卽位。由レ是、唯除二賀使一、以外不レ召。則汝等親所レ見。亦時寒波嶮。久淹留之、還爲汝愁一。故宜二疾歸一。仍在レ國王及使者久麻藝等、肇賜二爵位一。其爵者大乙上。更以二錦繡一潤飾之。當二其國佐平位一。則自二筑紫一返之。

・天武天皇4年8月条（675年）

壬申朔、**耽羅**調使王子久麻伎泊二筑紫一。癸巳、大風飛レ沙破レ屋。丙申、忠禮畢以歸之。自二難波一發船。

【４】『高麗史　巻57地理誌2（**耽羅縣**）』

初無人三神人從地涌出今鎭山北麓有穴日毛興是其地也。長日良乙那次高乙那三日夫乙那三人遊獵荒僻皮衣肉一日見紫泥封木函浮東海濱（中略）紅帯紫衣随來有青衣處女三人及諸駒犢五穀種乃日日本國使也吾王生此三女云西海中岳降神子三人將欲開國而無配匹於是命臣侍三女宜作配以成大業」使者忽乘雲而去。（後略）

【５】『耽羅志』三姓穴

廣壤三穴如品字三乙那湧出之地三乙為毛故名其穴日毛興耽羅在南海中厥初無人物三神人從地湧出長日良乙那次日高乙那三日夫乙那三遊獵荒僻皮衣肉一日見紫泥封木函浮東海濱就而開之内有石函有一紅帯紫衣使者随來開函有青衣處女三及諸駒犢五穀種乃日我是日本國使也吾王生此三女云西海中岳降神子三人將欲開國而無配匹於是命臣侍三人女来宜作配以成大業使者忽乘雲而去三人以歳次分娶之就泉甘土肥處射擊矢卜地良乙那所居日第一徒高乙那所居日第二夫乙那所居日第三徒始播五穀且放駒犢日就富庶

【６】『三国志－魏書　巻30烏丸鮮卑東夷伝』

又有**州故**在馬韓之西海中大島上、其人差短小、言語不與韓同。皆髪頭如鮮卑。但衣韋、好養牛及猪。其衣有上無下、略如裸勢。乗船往来、市買韓中。

『後漢書－韓伝』は「州胡國」、『通典』は「州胡人」と記している。

「州胡」の「州」は周代では、2500戸から成る集落を指し、「胡」は漢民族が中国の北部・西部の異民族を卑しんで呼んだ蔑称。また、「あごひげが長い」という意味がある。著者は「耽羅人」と「州胡人」が別種である可能性を指摘しているが、済州島では中国の「新」の時代に流通した「貨泉」が出土している。この事実は、中国と耽羅との通交の可能性が指摘でき、したがって、『三国志』が記述する「市買韓中」の記述は疑問である。

【著者の略歴】

大阪市生まれ、ソウル大学師範大学文学部歴史学科卒。別府大学文学部史学科卒。立正大学大学院文学研究科修了。済州第一中・高等学校教師、五賢中・高等学校教頭、五賢中学校長などを歴任。

著書に『済州島民族と観光』、『済州道観光』、『済州島風物』などがある。

12月の例会報告

○難波の宮の真実（その１）

一宮市　　竹嶌正雄

書紀を読み解き、難波の地の範囲を定め、応神天皇の大隅宮と仁徳天皇の高津宮は九州勢力が単独行政を行う為に磯城・纒向・磐余地域から脱して造られた宮であるとした。

○「日本国」国号制定考

名古屋市　　佐藤章司

書紀の白雉五年（654年）二月の遣唐使の記事と『旧唐書』高宗本紀の永徽五年十二月の倭国の琥珀・瑪瑙献上記事は同一の遣唐使であり「日本国」の国号は白雉五年（654年）が始まりと主張した。また、『旧唐書』日本国伝の地理・神名由来記事は、九州王朝史書類からの盗用と転用であり真相を語っているもので間違いないであろうとした。これに対し「日本国」と称した時期は、『新唐書』『三国史記』に記述の670年が妥当ではないかとの意見があった。

○『旧唐書』日本国伝について

名古屋市　　佐藤章司

日本国伝の記述をもとに地図上に日本国などの区域をプロットして考察した。

「数千里」は短里で５，６千里であって日本国側が短里で説明した内容を唐側では長里だと誤解したのではなかろうかと述べた。これとともに未だ書紀等の正史がなく、入朝する者が各人各様の説明になったため、唐は実をもって応えないと評価したとの見解を示した。

○「法興」年号（２）ー古代史覚書帳ー

瀬戸市　　林　伸禧

法興年号の出典について整理した。また、法隆寺釈迦三尊蔵後背銘の拓本を分析し「卅」と「世」が書き分けられているとともに、２２は「廿二」と記述されていることから「法興元卅一年」の「卅」は「三十」だと明らかにした。

○古代逸年号に関わる疑念　その２

名古屋市　　石田敬一

法興寺の寺名は法興年号に因んで付けられたと延暦寺等の事例を示した。また、数々の事例から年号に因んだ寺名は、寺が完成した以降の時期に名付けられたと主張した。

会員募集のお知らせ

2015年度会員、及び会報誌会員を募集します。

１　**年会費**：5,000円

２　**特　典**：例会参加料無料（欠席時は資料送付）
会報誌「東海の古代」の配布
論集「古代への碑」の配布

３　**納入期限**：2015年3月15日

４　**振 込 先**：ゆうちょ銀行
名前：古田史学の会・東海
店名：二一八　　**店番**：２１８
種目：普通　　**番号**：１２９９３９５１

例会の予定など

１　**日　時**
・１月１８日(日) 13:30～17:00
・２月１５日(日) 13:30～17:00
・３月１５日(日) 13:30～17:00
・４月１９日(日) 13:30～17:00

２　**場　所**
名古屋市市政資料館　第2集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051

３　**参加料**　５００円　（会員は不要）

４　**駐車場**
・名古屋市市政資料館：12台＋α収容(無料)
・ウィルあいち駐車場：南隣、30分170円
・鈴木不動産ｺｲﾝﾊﾟｰｸ：南東角交差点東40分200円

５　**交通機関**
・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩８分
・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩５分
・市バス「市政資料館南」、北徒歩５分
・市バス「清水口」、南西徒歩８分
・市バス「市役所」、東徒歩８分

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会での研究報告、発表は大歓迎です。資料を配付される場合は、「**20部**」をご用意願います。

編集後記　これまで長い間、林伸禧氏が編集を担当されてこられました。たいへんご苦労様でした。今月号から石田が担当しますのでよろしくお願いします。

-